

平成25年度「重点研究費」研究成果報告書

| | |
|------|---------------------------|
| 研究課題 | 発達障害児の視覚的認知・実行機能の特徴と教育的支援 |
|------|---------------------------|

研究代表者

| | | |
|-------------|----------------|-----------|
| 氏名 奥住 秀之 | 所属 特別支援科学講座 | 職名 准教授 |
|-------------|----------------|-----------|

研究分担者

| 氏名 | 所属 | 職名 |
|----|----|----|
| | | |
| | | |

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

発達障害者支援法の成立、特別支援教育の開始と推進、そしてインクルーシブ教育への転換などに伴い、LD(学習障害)、ADHD(注意欠陥多動性障害)、ASD(自閉症スペクトラム障害)などの発達障害児の理解と支援の必要性がますます高まっている。こうした中で、発達障害の認知特性を解明して、それに応じた教育的配慮・支援を考案することが求められている。

本研究は、そうした発達障害の認知特性の解明の手掛かりを発見することを目的として行われたものである。研究テーマとしては発達障害児・者の視覚的認知と実行機能を選択したが、研究を進める中で、多岐に渡るより幅広い認知機能を対象にする必要が生じた。そこでワーキングメモリ、プランニング、抑制機能、シフティングなどにまで検討を広げたが、これらはいわゆる実行機能の構成要素とされるものであり、近年発達障害との関連で注目されているものである。

また、視覚的認知の1領域として、視覚走査や注意のアセスメントとして注目されているキャンセル課題についても取り上げた。さらには入力系の側面のみならず出力系(運動系)の問題として発達障害児の不器用を取り上げ、アプローチした。発達障害児と不器用との関係となると発達性協調運動障害(DCD)をまず思い浮かべるかもしれないが、他の発達障害もまたこの問題は認知的な側面と絡めて検討する必要がある。

作成した報告書は以下のような内容からなる。①発達障害児・者におけるプランニングの特徴と支援、②発達障害児・者におけるワーキングメモリの特徴と支援、③発達障害児・者における抑制機能の特徴と支援、④発達障害児・者におけるシフティングの特徴と支援、⑤発達障害児・者におけるキャンセル機能の特徴と支援、⑥自閉症スペクトラム障害児における不器用について。研究の遂行は研究代表者に加えて、この領域に詳しい6名の大学院生等の協力を得た。

特別支援教育の推進と今回のテーマとの関連でいえば、発達障害児の認知特性の実態把握(アセスメント)とその特性に応じた教育配慮・支援は、特別支援学校は言うまでもなく、小学校等の通常学校においてもきわめて重要なテーマとなっている。国語、数学等の教科学習はもちろん、給食や休み時間、各行事など学校生活全般に関係するものでもあり、さらには他者との円滑なコミュニケーションにかかわる側面もあるだろう。今回の研究では配慮・支援を具体的な実践研究の側面まで広げることができなかったが、その知見の積み重ねは急務と考えている。

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

Okuzumi, H., Ikeda, Y., Kokubun, M., Hirata, S., & Haishi, K. Walking and balance ability in people with intellectual disabilities. IASSID Asia-Pacific 3rd Regional Conference. Tokyo, JPN (August 2013).